



門 4
3221
巻 5

山 勝

利根川圖志卷五

下總 布川 赤松宗且 義知 著

麻賀多大明神

載了乃印播郡一座麻賀多神社是あり

公津村稷山の上小あり里人てくろの延喜式不

是あり公津の村名臺方を本と

是。下方江弁須大袋飯仲。之乃公津不属也。まこ公津新田あり。古

へ神津と書たるより。今臺方の下小鳥居河岸ありて。沼の中不

鳥居建り。あまきふいち神津あり。佐倉風土記云。應神天

皇御宇。印波國造伊都許利命齋祭稚産靈神攝社本三十八座。今

存者五座。曰印波國造社。曰幸靈神社。曰馬來田。即女神社。曰猿田

彦神社。曰天日津久神社。社司太田氏家藏貞治永正官幣祝文。其

祖家清記詳焉。有七井七臺併在社外四方三百步。所謂初井。花井。

北井。南井。御手洗井。大井。椿井。乾有説教臺。北有北野臺。東有元松

北井。南井。御手洗井。大井。椿井。乾有説教臺。北有北野臺。東有元松

北井。南井。御手洗井。大井。椿井。乾有説教臺。北有北野臺。東有元松

印東

昭和九年
九月二九日
購求

臺南有平松臺。天神臺。西有社司殿臺。花輪臺。神門。左右百二十步。有七冢。正月七日採七種菜於七冢而薦之。古有祭田七區。七氏分掌以供祭祀。油免薦布免。穗棊免。團子免。神酒免。御齋免。巫免。是也。今僅存其名耳。後俗曰租

神津八十墓。在神津村東北二三里原上。多數故名之。傳千葉氏也。世之瑩然不詳名誌焉。

起林寺。在神津臺方。文明十三年平輔胤建之以常陸國杉室大雄院五世。周裔和尚為開山焉。

平貞胤墓。在神津麻野碑誌曰千葉貞胤當鄉諸人各敬白于時觀應二年辛卯天四月日。其石今在起林寺庭際焉。

公津宗吾墓。公津村臺の山中にあり。成田より一里西の方あり。墓碑左の如し。

德滿院涼風道閑居士。右の服。小道了彦七道明。德治左の服。

小道安乙治道露。德松とあり。あへ四人の子供あり。

又同村菩提所鳴鐘山東勝寺。真言の過去帳。小へ道閑信士。俗名宗吾。兼應二癸巳年八月四日と見ゆ。是もとの改名あり。その後

寶曆二申年百四忌の節涼風道閑居士と改め。そめて石碑と造立せらまきとあり。寛政三亥年院號とそへて今の石碑

小改め建つとあり。石碑小四人の子供と。皆男子の名ふまき。たふの故あり。夏と抄。宗吾の妻へ同村理兵衛といふもの娘

ふりし。是は宗吾出訴の以前。四人の子を遣して離別せしと

ひき。故に妻は宗吾死しての後十七年とふがらへて寛文九酉

年九月十四日小病死とといふ。改名は妙閑信女とおれ。過去帳不見。由宗吾の父子五人。際際せらまき。事は世人のよよく知るところあり。

東勝寺本堂不在。位牌の文。左ふ

位牌の表

道了 道明
德滿院涼風道開居士
道安 明露

同背面小

道開 俗名
了明 安露
長男 彦七
次女 ホトウ
三女 ホトウ
季女 トチ

兼應二癸巳秋八月四日父子五人爲國民捐命寶曆二壬申年。正當一百回忌而改涼風道開居士。又享和二壬戌執行一百五十四忌之法會寬政三辛亥追謚德滿院造立石塔皆依領主之命。茲嘉永壬子係二百遠忌由是造立廟堂及神像神版等若干物以當法事充追遠之禮。

鳴鐘山主照再拜誌

鷺山壘

在神津村上千葉氏世居之天正中良胤時城廢焉

藥師寺

船形村小あり本尊藥師佛ハ行基僧正の作開基不詳

鐘銘曰

下總國印東莊八代郷船形藥師寺應長元年亥年十一月願主僧良圓敬白大工沙弥善性と見ゆ

船形神社

佐倉風土記稷山内津社在船形村千座山距稷山社可

二里亦伊都許利命齋祭雜日灵尊以爲瀧津宮攝社三座曰賀志

波比賣神社曰阿須波神社曰八代稻荷神社是也

根山神社

北須賀村門河とりの小所小あり牛頭天王と祭る此所

鳥獵茅一の場と云ヤウギリ綱あて捕切と云義あり此邊沼

小真菰多一水鳥ハマコモの實と好て養了者也バコモの實ハ

麥の如き物小して人え是と食之詩佛西遊詩草云美濃國今尾村足立

氏宅食菰米菰米之著於書自屈原以下及唐宋之詩人言其美者

多矣我邦未聞有賞之者予食之以今日爲初因賦一絶而記其事

淡於蕎麥香於稷真味初知在水脚非向君家留竹枝一生不信

ヤハライボ



春真

背の羽

頭の羽

同足

腹の羽

胸の羽

五 印東

四

有菽梁 菽米一名菽梁

谷原イボ 六の鳥畫ハ人目ふめくら故不見人稀也大さ

羽色とも鷺不似て黄を多く帯たり五月頃より昏夜若中ふて

ス細くイボ大ウイと鳴く聲螺不似たり大倉州志七十物産羽之屬 蘆

車々 潜蘆葦中北郷謂之蘆鴉夏秋入餌

ホシく鳥 小鳥みて谷原不栖也夏月昏夜ホシくと細く聲不

て鳴く鳩より小さ

天竺山龍角寺 龍角寺村ふあり寺南小洞穴沙伽陀池ふと名所

あり諸國圭齊録下總國天台宗ふ二十石植生郡龍角寺村 龍角寺と

見ゆ佐倉風土記云傳和銅二年龍女化現奉金像藥師來建寺天

平二年釋命上人再興諸堂三年天下旱魃命奉勅說法祈雨一

叟長可八尺進曰我小龍常居南池深浴上人法澤何惜一軀請以

身換兩後必見我骸而證之即是為大龍所罰也忽然而去兩從至

馬後七日果有龍身今裂三段頭墜于此乃金字寫經併座堂下寺

始曰龍閣於是改龍角腹墜于印西龍腹寺其尾墜于香取郡今大

寺村龍尾寺是也貞觀元年慈覺大師住此說法天曆三年三月八

日異僧來彫金剛神一軀畢忽失所在柱上留題曰此寺藥師乃西

天竺祇園精舍療病院之像故我為彫金剛神而猶恐人不信一軀

而止我是昆首羯摩也正曆中運慶續刻石金剛神化作即左今共

存焉兼久二年上總介平常秀重修營常秀千葉常重曾孫稱坂平

次兵工也正應三年十一月鑄巨鐘文明中焚如而寛永三年改鑄

馬文明永正再罹火災平勝胤修造焉天正八年又有災平邦胤重

造營焉相馬日記云崎村とつり所行り上平からすと登る

むつりとの近きとふり天竺山龍角寺の真中ふり百丈

とこの朔日十五日廿八日ふり海の真中ふり百丈

といふ洞穴龍灯とひあふりての社の御前より居る

大なる洞穴三ありて中小石壘と敷設け昔ハ人住りと

おろしき隠れ座頭と松木の根ハ住りとつて七木の洞穴の上

小国内第一の大なる松木の根ハ住りとつて七木の洞穴の上

うさふはへりとはさくて谷下八十把の池とて水多
くもふさり有りのとさきく一河下松一本たてりハありひふ
つめりこの池のあさこへ一日下千把の苗とてうむとかせさ
るる子痕れ、田をふまるとと埋りて去るの松とて千ハ
池とてりふもそれと
負へる名ふとそ

駒形明神

安食村ふあり佐倉風士記云社司木内晴風十五世木
内三郎宗文正安二年九月記曰下總国埴生郡安食郷駒形神社
郡司大浦朝臣廣足所祭穀神也天永二年夏五月廿一日安食郷
大水同三年夏大旱仁平元年夏六月十五日又大水民大飢凡三
年矣於是同年秋九月九日建社於駒形山上用祭五穀神焉其社
號曰駒形神社同二年五穀大孰是年郡司令曰是則神之賜也自
今以後民可得安於食也請改號其郷曰安食郷又置神田使木内
晴風掌祭祀焉安食郷舊名川崎郷郡司大浦朝臣廣足 崇神天
皇七世孫御諸別王之苗裔也今社司木内氏藏之享保四年吉田
兼敬卿書跋云

鷲宮

同村印播江へ指出たる山の頂ふあり別當正徳寺毎年正
月十一月初酉の日遠近の老若参詣群集此所印播江の下流
みて長門の口と云渡長門のありみて印播江と將監川と落合ひ
夫より東の方へ五六町流れて利根川ふ合を三方の船着みて
至て賑はしく繁昌の地あり

布録新田

南將監川と北下利根川との間あり一嶋あり此の嶋
上ハ木下より下安食まで堅二里横一里とりの元録年中開發
村數二十五川除堤周圍長六千四百五十七間其内三千五百五間
ハ北利根川通り二千九百五十二間ハ南將監川通りと古書ハ
見えたりされど古くよりあり嶋も常總軍記ハ布録ハ
布録但馬丸岡喜一同彦市あ見えたり

藤藏河岸

生板真山新田兩村入會の地あり下總常陸兩國ハ跨
る其れめ藤藏と云獵師住一所也其名起きりとぞ今ハ利根

川運送の荷物龍ヶ崎邊へこの河岸より上下する由至て繁昌のところが龍ヶ崎江一里

龍ヶ崎 常州河内郡あり仙臺君の御陳屋あり享保十三年水無

月下旬みちのく此大守羽林中良將吉村とつゝ鹿嶋

道の記云その日へ道とるくつれは暮ふなり戌の刻をく

る程不布川とつゝ所に着てやどりぬ又の日常陸の國ふい

るまづくふ二里斗つる道なれば巳の刻をうけたりつたぬ

是龍ヶ崎爰もそが領地のありなればとこら此者ども出あひ

てあるひしてうあことなと見せ侍りぬそのらみ文治の比を

ひ我祖常陸入道念西宗号朝同宗村等の住給ひ一真壁郡中村の

庄へ此とこらより十餘里とをたててもうなるよう一城のふ

此度らふ来る序不見まほしくおもひふんど遠なれば見

ぶして過了事の本意あるの朝村主のめと初とおもひ

それと筑波根のまを輪の田井も住あれふなりとよと給ひへ新拾遺不入侍にやとれり昔の事とたりひ出て見ぬ世の事もあつううりなをさば

近めらば行て見ゆ筑波根は裾乃田井の世々のあな

あと北ふあさきて古城なりこれへ天正のころ土岐左衛門尉

頼貞とつゝ人住なる城ありといふ四方小堀のうとありて

築立たるやうある山城あり樹木枝とありひ茂りあはたる中

不太神宮鹿嶋の神代社あり上の平らふして中ふ谷とへたて

て二の曲輪をうまくと見えたり其曲輪の東ふ龍ヶ峯とい

へるとと海あり爰ふのをみて見渡し侍るふ東のかまはれ海

見えて眺望かぎりなり南の田面さうふ片はらそありた向

田子のさあへううはら管の小笠うちきで聲成あげてうと

ひのうまはらふいと真ありてまばらく時をうつゝぬ

乙女子が笠のあはれなく小山田早苗とてけいとあはげな
る爰を出て大統寺盤若院あといへる寺小行ぬ寛永のころ山
戸土佐といへるもの此所小久しく住居せむそれ人建立せ
し寺ありといふ今領地のうちあるまじりさ、りの寺領残つ
け置ぬあはれ僧爰ふきたる事とよろこび出會てとまなひ
ありく南ふあたりて愛宕社ありそれいちう此盤若院別當つ
とむるとそ先たち行ぬこの山下ふあつと塚といへる古塚あ
り何の由あるありともあらだむりしういひつとある名なり
といふ見ふにわがとのもちとあせさるやふ形あり夫のあ
らうといへるあはれ一夕つらと舎をふ入てあはれあはれとて
へがさわりしつらと志めざりれいひふど志たゝめてあ
みふ日をくらし侍るふ庭の木ぬき隠ふ蟬の鳴を聞く
おのがあはれうきあはれ猶この頃けあつさやあはれ蟬の鳴

ら守夜ふ入て所ふ片けあはれ目代郡司あはれ茂めし出して今
での所はあはれ茶どくといへたる証あらとあはれ事あは
れあはれ本國ふ替り他の領地もあはれりたる事あはれあは
心をつけて民の勞をふくつらふべしと人といへる事
あはれあはれいふくめあはれ河船ふ乗て潮來のつらあは下
るべし船の數出さむもところれあはれひしうあはれ供あは
そのも半の中漢あはれ陸地をたういふべしとあはれさり船
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれ夜半あはれ頃より風吹出ぬ明行頃あはれあは
侍る大統寺盤若院來りあはれあはれあはれあはれあはれあは
たあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあは
大字ふ書たあ詩を彼あはれあはれあはれあはれあはれあは
とてよろこびあはれあはれあはれあはれあはれあはれあは

ごあり猶風やまな船のうちいりぐとせへば追手あきばさ
りあらとと宿のあふとつふふまうせて日出る頃不出ぬ一里
餘り行て利根川のやとりた至る藤藏爰より船ふのれり側近
さもの十餘輩とらざりておふと船ふのふ外さふれその船五
艘ふあつらへて漕出ぬ所の男女川岸ふはどひ見物せりいと
それぐま浪まこし高うらうかども河船あれば何のあは海
ら死事もふあつさへと去れそて、身ふむ風の秋々とい
ふりあるとる

こぬ秋をうかへつら船ふりうふくと追手まぐし川々せぞ
ふく
潮來の宮本水雲云龍ヶ崎ハ信田郡江戸崎の城主土岐美濃守
治頼が二子左兵衛督胤倫の居城あり其上正平五年北朝康
日中將顯國三村より起りて馴馬沼田城ふ入といふ事鶴岡社

勢記不ええたるハ土岐氏の後ハ棟と龍崎ありへ馴馬
古城あり龍崎ハ其隣村あり殊ハ新地ふまハなり且其城田地
を東南ふらけて沼田といふ名目もふらうと云

常總軍記卷十二云常州江戸崎ハ土岐主藤龍ヶ崎ハ土岐大學
津守頼光の嫡頼國の末子美濃守頼房始て美濃國土岐郡に住
る是土岐の先祖也然るに其頃人皇七十二代白河院御宇兼
暦年中六孫王經基の次男武藏守滿政の曾孫ありて駿河守定宗
といふ人頼義義家御父子の武門棟梁の如く君の御おえも
よきととそねみしり身ふれハ自力ハ叶ひらく頼房の家
督美濃守因房とて、めて隠謀とあせりかくて濃州青の原
一戦ハ打ちけ定宗ハ腹切て死に因房ハ罪と謝して降参せり
官大寺大納言殿を守りて當國ハ永保年中頼房は陸の因房本
徳大寺大納言殿を守りて當國ハ永保年中頼房は陸の因房本
崎土岐の祖ありされ八年入て武勇の家ありハ近郷を伐り
推塚駒塚羽賀小の古渡大屋佐藏君嶋大室ありハ庄布川幸
佐登戸半田長峯君山長掉以下都合八十三郷と持つハ信田
郡河内郡に今ハ兄弟の中也去ハ龍崎後誥セハ心多あり元來
同流ふして今ハ兄弟の中也去ハ龍崎後誥セハ心多あり元來
り是と助け江戸崎と攻れハ又龍崎後誥セハ心多あり元來
も是と助け江戸崎と攻れハ又龍崎後誥セハ心多あり元來

稻敷郷

龍崎の東あり八代村といふとあり宮本水雲云今の
八代村ハ和名抄稻敷郷あり今ハ其地ハ稻塚と云ふあり風土
記常陸風土記也信田郡の下ハ風俗諺云葦原鹿其味若爛喫異山実矣
常陸下總二国大獵無可絶尽也其里西飯名社此即筑波岳所有
飯名神之別屬也とあり葦原ハ今龍ヶ崎以下長棹源清田より
下總の地ハつたり新田とありさる地ありて古葦原あり一時二
国の界あり地あり残以て二国の人々獵せし所といえたり
扱飯名ハ即後ハ稻とつりしものありて稻敷といへりハ飯名
の神の敷地あり故此名あり後ハ八代とふれりも社ありて其神
社社より地名といふなりなり此地下總相馬郡於賦駅續日本記按和
名抄郷名の意郡郷
同地而今其地不詳より此地とへて信田郡榎谷駅今羽賀村也
續日本記按
不のさる古の官道あり故ハ扶木抄多院入道稻敷の里ハ
是をぬらんりて孫ハ次郎百首鴨のうくれぬり
ら

ふせ 皆此地とよむる歌あり是官道あれば自然詠歌のま
そのあり

栗林義長傳 常州岡見の長臣栗林下總守義長といふハ同國河

内郡根本村の農夫忠七の三男竹松の孫あり云傳ハ常總

軍記卷十云 文畧 根本といふ里ハ一人の農夫あり名を忠七と

いふ貧あり者といふども慈悲ありて正直ありて一人の母ハ

孝あり或時母少一病あり事有るふ是疾ありト土浦ハ至り藥

と求め其よりへるさ根本ハ原あり、まきり人里遠き野原ありて

道あり人も稀ありるふの古狐松のりけハ寐入て居たりけ

ると其ありり此獵人志のびよりて射てとらんと秘らひしと

の忠七ハ是と見てふむんと思ひ助けやらんと高らハ不咳と

去たり一ハ狐ハ大ハ驚きて目と覺ハ草むらの中へ入り

入るる獵人の大ハ腹立獲ものをとりへせとのくしる由忠七

さぬくと詭言ふれとも穢人のさらふ聞入る忠七是非あく
二百文有るる錢せりの者不遣いーやうくと見びーて我家不
歸りたり然るふ其日の暮つくと五十有餘の男一人をたら斗
の女を連れて忠七方ふ来り云らるやう我ら奥州の者あて録
倉へ行せのあるが日暮て難義ふ及ぶ何卒一夜の宿をわして
たべと涙ふがらにひひと故母も忠七もふびんと思ひ道も
志まぬ野原なると足弱を連さるべ定めてあんどさるべー
一夜の明させはつるべーと其夜の二人をとあさりたり借翌
朝ふふとそればかりの女泪をるがー云らるやうこづらら奥
州岩城郡の者あるが不仕合の事ありて身上と志まらひ鎌倉の
伯父の所を尋ねんと譜代の家來を供ふつれ此所もて来りー
が昨夜さらぬ寐入ー時々の男の路用を持て送ーと見ゆらへも
もくやーとれ最早後へも先へも行がたー何とぞ鎌倉へ参る

迫いりある憂くげんも仕るべとれ御くらまひたぐーと
泪流して頼るに母も忠七も實心の者あてふむんと思ひ
然らへ四五日足をやせめ給へ何とぞして鎌倉へ送り届け申せ
べーとしてさー置らるかくて此女容顔美麗のとあらば發明ふ
して農の業も是より早く糸機針仕事いと川とてあらさる
事あく何夏もやさしく母もよとく仕へーゆゑ母も殊の外氣
ふ入道所あたりの者迫も誉さる人のあがりなりうて月日
小関守あく四五日と思ふ内ふとや四五十日も過らるが迫所
の者心つさ母と忠七ふ相談隣家の弥兵衛を仲人とする一
方咄し調ひ一故忠七と夫婦ふとそいふなり早くも八年の
星霜を経て三人の子を設け姉のお齋い七才ふなを其次の亀
松とて五才あり三男竹松い三才あぞ成ふらる折しも秋の末
つら女房の庭の方をうつとて詠め居らるが泪をまがー



川北

みどり子の
まじりこころ
をなげけ
ふす
ふす
ふす

十一



五

春長

口を思つても人間不相あはさるのふらふらと思ひしはもはや
ハとせ残過さうち三人の子造設けし夏あまきと浅きし根
本が原ふ年経たる孤ありひととむ人ふさとられて人間界
の住居へあはれ畜生の行へこそあふれと涙を流し一人
おとて泣きめけども悔てうへらぬ身の上あまきふあても
不使なるい三人の子供いとをしむい母うへ様忠七殿も名残
をし此ゆく別きて行ふさばさぞや後あてうらむらん堪忍志
てとて忠七どのとくせりへしとせさくる泪と諸共一詩を
まてめ竹松が帯へ結ひつけ夕暮ふ根本が原の古塚ふるく
く別きて帰せらる

昔日贖死野狐身偶嫁人間入忠家鴛鴦被暖八年夢積夢一女
二男生花晨月下撫前後某日冬夜戀紡績被知丁朝吾牛所帰
去古塚自別離別離悲淚今難堪月三更女化之原

みどり子此母いと問ひ女化の原ふあはれと答へよ
さて忠七い三人の子供を養育し後三男の竹松成長の後京
都不行て身を立其孫十二才あて古郷あつりてとて関東へ尋
下りし信州の山奥あて道迷ひ異人小逢ひ其所小五年を
送りし内天文地理軍学文武の道小達し十七才小して常陸の
國へ來りたる爰小岡見の臣小柏田の住栗林左京と云者あり
一人娘有たる故此を聳とるし栗林次郎と名付後小下總守
義長と号し関東の孔明と称し是より後根本が原とをま
慈雲山逢善寺 小野村ふあり總常日記讀むむりしつづの程ふ
ら逢善道人とりのがらふ菴めてたこあひすしおを
志しと慈眼大師遊歴してあふ不來りたを志しと道人大師
小申そやう和僧ふふ一字とて給へ大慈者を感得せらる
庵さしありとかさらひおさて道人いらせぬ大師不思議ふ

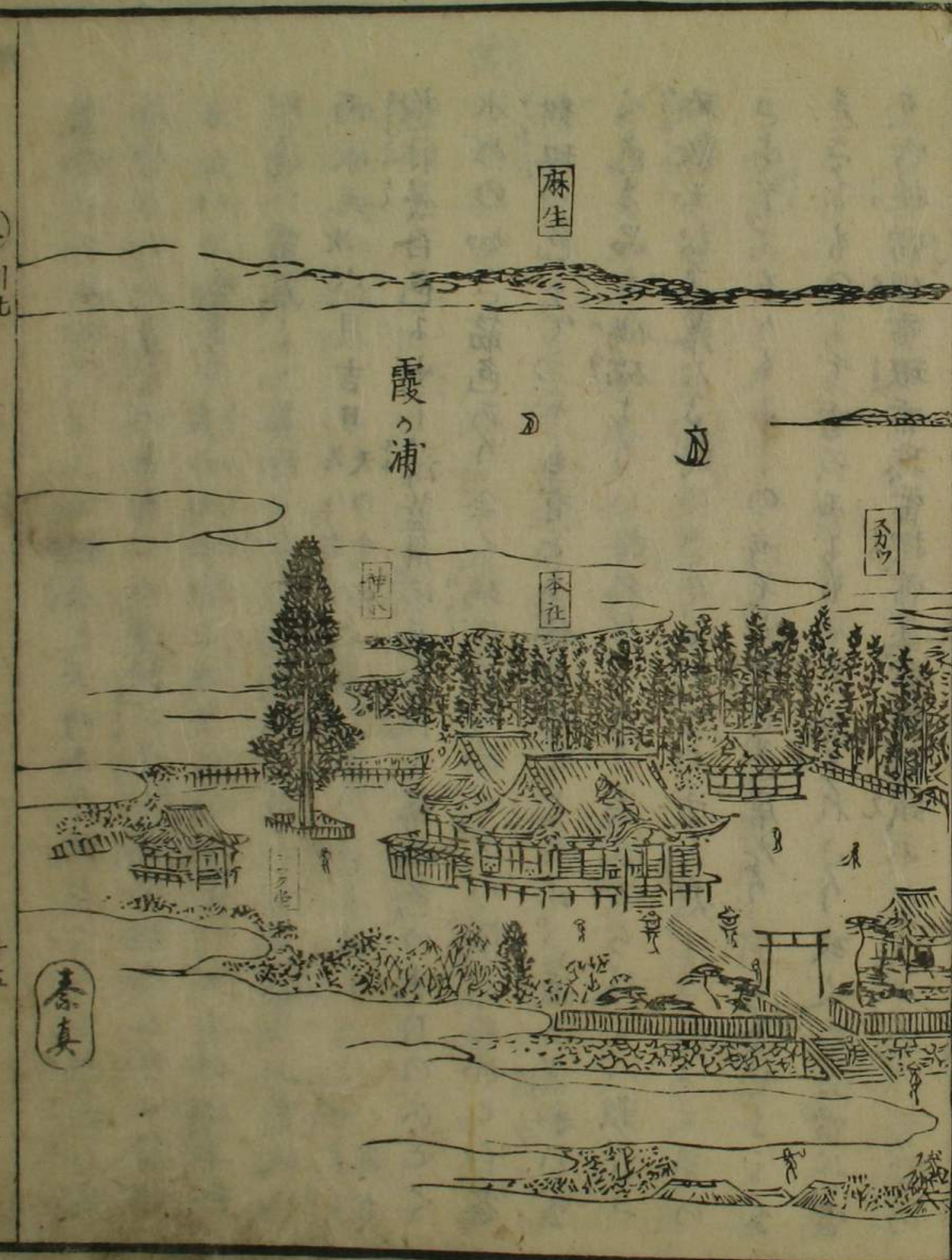
おぼしたるたつりつくともなく感得し給ひたる像也と我々本堂
いと大きくて莊嚴又さくらく二天門などおこそり也廊は
さ小て寺へまうづ逢善寺といふに彼道人の名ととりておや
せたりとぞ今も東叡山末あて寺領二百石云

高田権現 高田村小有總常日記云高田権現ふまうづ小野より
廿丁といへり熊篋と同躰ふおとま朱雀帝兼平年中創造とや其後世
々のことさふあひておとろへたるを慶長七年三百石に神領と賜へり

今も本社并殿のふおこそりあり神司と千田九京といふ云

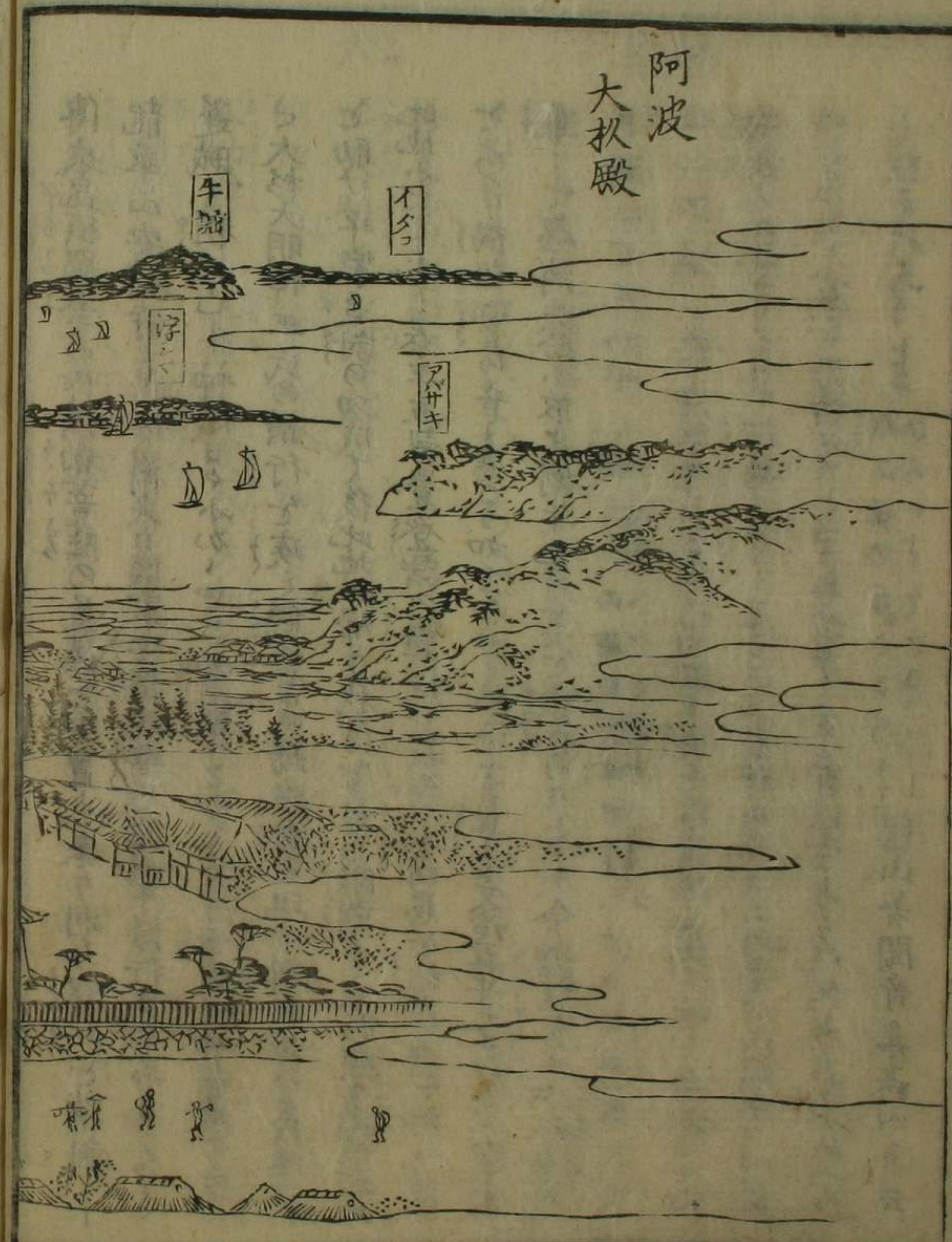
大杉大明神 阿波村小あり別當龍華山安穩寺往昔より今宮大杉大
明神と崇め奉る神麻の神護景雲年中釋勝道上人御作の降魔の靈神
不動尊あり其後桓武天皇の御宇延暦丙子の年傳教大師の御弟子快賢
阿闍梨奥刃の逆賊降伏のため大師自ら彫刻を給ふ四魔降伏の不動明王を
乞請給ひ此地小来り靈夢ふよて大杉大明神と同一鎮座ふ奉り且天竺

傳來昆須羯摩の作彌勒菩薩の尊像と安置し奉り則ち寶刹と草創し
龍華山安穩寺と号す爾来日國家安穩祝禱の護摩修行日々怠りなく
逆賊も稍滅亡し神威日々小かやと靈驗まよく著り于茲元暦文治のあひ
と大杉大明神平氏の横行を疾く假小常陸坊海存と現し判官源の義經公
を助け平家追討の功成て後此地小帰り我像を自ら彫刻し大杉殿に納め永々
此地小して天下泰平五穀豊登諸の難厄と救護し病患と穢し悪を抑へ善
とらけ禍福郷音の音に應り如くふらめんと言畢て文治五年九月廿七日彩雲
乘りて忽消失給ふ依之例年九月廿七を祭日の日とし今奉行する以上縁起
名物 せんへい 是より西浦須賀津河内岸へ十八丁判振川押
田の浮嶋 霞浦小あり常州信田郡に屬す浮嶋正此に居り今船ツカ山
鞍懸の松蛇峯人見の塚馬もくふとの名所あり又この島の三郎九工門雷
のむらと小物と所持せりと云り石小有す金小有れまあら何もせよめつら
し記えれありとそ 按小雷の落とる所あり想山著聞奇集卷四に云



春真

阿波
大板殿



東都市谷柳町のつさ根来と云所あり此ところ根来山報
恩寺といふ真言の寺有この寺に什寶龍の卵ふらひ雷の
玉といふ物あり龍の卵の説ハ本書雷の玉は大雷の礫早稻
田邊へ雷落し其所おちて有とのこあり裏帛ふ寛政八
丙辰天次六月吉日天ハ古の字也とあり玉のさし渡し三寸本書ハ
惣躰曇白色少薄藍嵐の色を佩て薄茶色の木目のみとく
氷めの如き筋色あり全く碼磁石の如く又ハ蠟石の如く白茶
紺斑の色あてつやも有とも碼磁のこどくそ通る光彩ハ
く色も品も碼磁よりハ格外劣りたり去るら外ハ類なき
珍敷玉な落たる時のさそや下の方と思しと所ハ三角の
さそ有てふらも少一の所そと皮とま居たり何もせよこ
まさるものもて雷の玉もやと思れり或人の云雷斧雷
刀、雷槌雷礎雷環雷珠雷楔雷墨雷劍雷鎖ハといふもの有雷の

落こる跡ハ有えの也三味線のむらの如くもて印部の焼物の
ことと紫黒色ふるハ雷斧ふるへく丸くして僧の袈裟よりく
了掛絡のこととよりて白色もて青を帯たしハ雷環もて牛角
の如く本太く末鋒り紫色も赤を帯とハ雷鎖もして石もあ
らま土もあつた添の如きめくよりハ雷墨ふるへといへり
左はれハ是も全く雷珠の類ならんと思はる按ハ三郎左工門
霞々浦船軍 江戸崎龍ヶ崎の兩土岐兵船七十餘艘霞々らま
浮へちつ信田吉渡不出て浮嶋彈正黒田石見を案内と此ハ
江戸崎の懐てありたり上ハ佐竹近年疎意せしむる也心
いふとく思ひたりハ彼篠下を變ハ江戸崎の土岐も味方なり
其勢二百餘兩土岐の先手を勤め惣勢合せて千五百餘人兵船
も取のり霞々浦へ押出たり折々順風程よくして難場を
はくりなく押て行此より新庄藏人直昌聞て今佐竹より加勢
あきふおそれて土岐勢を船よりあけ立るものならハ川を渡

さき一敵とひとく味方氣おくれして千も利有へから
伝へ聞浮嶋黒田の攻手不加はり先手を勒むるよし
古一老臣也信田小太郎世盛の浮嶋黒田こそ船軍もふれしもの
見是石
ふき去とも小勢るるへおそふら西土岐り来り共
陸路の戦いともあれ船軍不於てハかこむらつてさ次第あり
いさやさへたつて逆寄し手並の程を見せしやん々と下知し
て兵船三十餘艘軍兵五百餘兵霞浦よりうりへて採りゆんで
富田の岸ふつく兼て新庄り制作あて艘船逆船三十艘船と云
板よてより切て中のでえさやうり敵船の中へ漕いきて
四方の窓をあけて弓鉄炮をつりへりく仕りけ也。逆船と
自由ハ逆ろを仕りけ敵の中へ乗入て前後左右と西土岐ハ風
もふくして難なく漕渡りて富田をさし行々るる向
ふあつて兵船のちこの手見えしハ浮嶋黒田きつと見渡
し麻生の新庄藏人ら藤巴の旗印かり定めて向ふとこえて候

我々先不進むべきあり引ついで漕よせ給ひと船を猛ふそ
しらせらるる不俄不艮の風吹起り空より曇り雨を催し寄手の
船自在らるる藏人是と見て大ふよろこび得たりやかこ
とくだんの船を矢のおとく寄手八十艘の中へ漕のち火水
ふふれとせめたるる西土岐えあそ大事と下知をふし豎
横むあゆん不戦へ共麻生勢ハ船軍ふふれし上船ハ逆ろと
艘船ふきバ飛鳥のごとく自由をなし殊不艘船ハ土藏のごと
作りふれバ敵の矢玉ハつもあたら空矢のこみて有るんハ
新庄勢のこころ乗こしくさくふ切立たりハ寄手討し
このおびたぐし時崎弥兵衛羽賀次郎松山兵衛村田次郎左衛
門佐藏齊宮太田半弥柴崎忠平伊佐津太郎と初めとして究竟
の兵八十餘人討死を新庄ハ唯一戦不敵船十八艘今捕し勝と
し揚て帰しりハ直昌が武勇いと高く聞えらる

湖水眺望

乾王何多う世ふの筑波山将まき子小土浦の
 城色々芦乃小尾ゆもあ家の美尾を誦るり
 永くともあやーまらぬ男の川西末は夕より山の
 流をさうも中潮末の森ハ遠近へりしよあまは
 岸のききハ浪を菊匂く伏るりみーしよき
 加茂明神の社を懐ひ河端立木の西大懸
 窓より北岸を歌き大慈の膳をさきしよき

高須の松ハ安け端の舞よかく建てて又ハハ
 舞舞急ぎを願き見叶末の杜蔭と有るハ
 勢至ヶ峯社勢尾山送舟也架り若浪舟船の
 田舎子田子侍を程常よあああり深き
 波乃小舟ハ漁舟也のさふさふ人影は
 思ふさうハまきけ美の浦もさき

小川日記のしるしをあらわす柳

舟林舎


○是より川南

一宮大明神 下總植生郡矢口村不あり 佐倉風土記云傳延長二年九月十九日祭之

二宮大明神 同松崎村不あり 年記詳あらむ經津主命と祭と云

三宮大明神 同成田とらむ 二三町西の方郷部村不あり 祭神詳ら

あらむ相馬日記不郷部村 植生大明神の社ありて鳥居不當

國三宮といふ額をかくこい神名帳不あり 見えぬ神あり云

三熊野大明神 南羽鳥不あり 延長元年八月十五日祭といふ

たそつ稲荷社 龍臺村利根川の畔堤の上不あり

長沼 佐倉風土記云沮於植生郡北南北可五六里西東可六七里

一六里多利於溉灌復宜於漁釣舟楫亦通但不可致大爾首南尾北

尾為兩派西過安西新田東經西大須賀俱入利根川亦時有陰火

出水馬長沼 船長沼 通長沼 舟楫利根川 のあり

新妻川 同書云一水出畑田東西北流十餘里至下金山西二水出

于印播郡江弁領西東北流七里至于下金山西二水會於此西北

七八里而入長沼馬佐倉風土記 之里程

飯岡川 出東和泉東西流過飯岡歷荒海南橋下而入于長沼

水榭川 出大室東十里西北流過水榭而入於長沼

長沼城跡 長沼村の上不あり 城主詳あらむ常總軍記千葉手配

の条不あり 長沼大野修理 と見えり

源太河岸 香取郡猿山村あり金江津と相對を是より滑川觀音

へ八町成田山へ三里

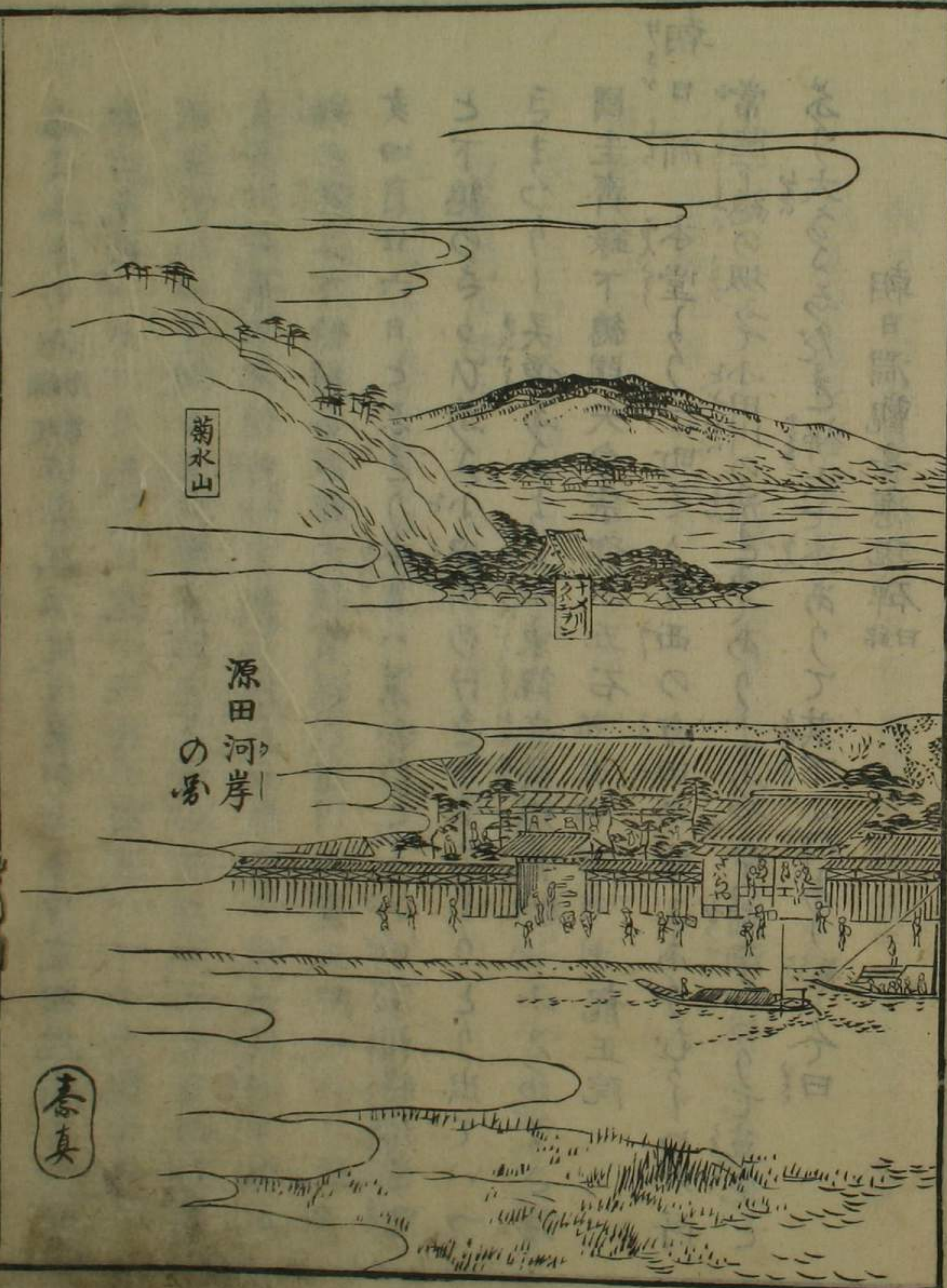
滑川觀世音 滑川村不あり 滑川山龍正院といふ坂東順禮二十

八番の灵場あり本尊十一面觀世音佛長一丈二尺 協立不動明王

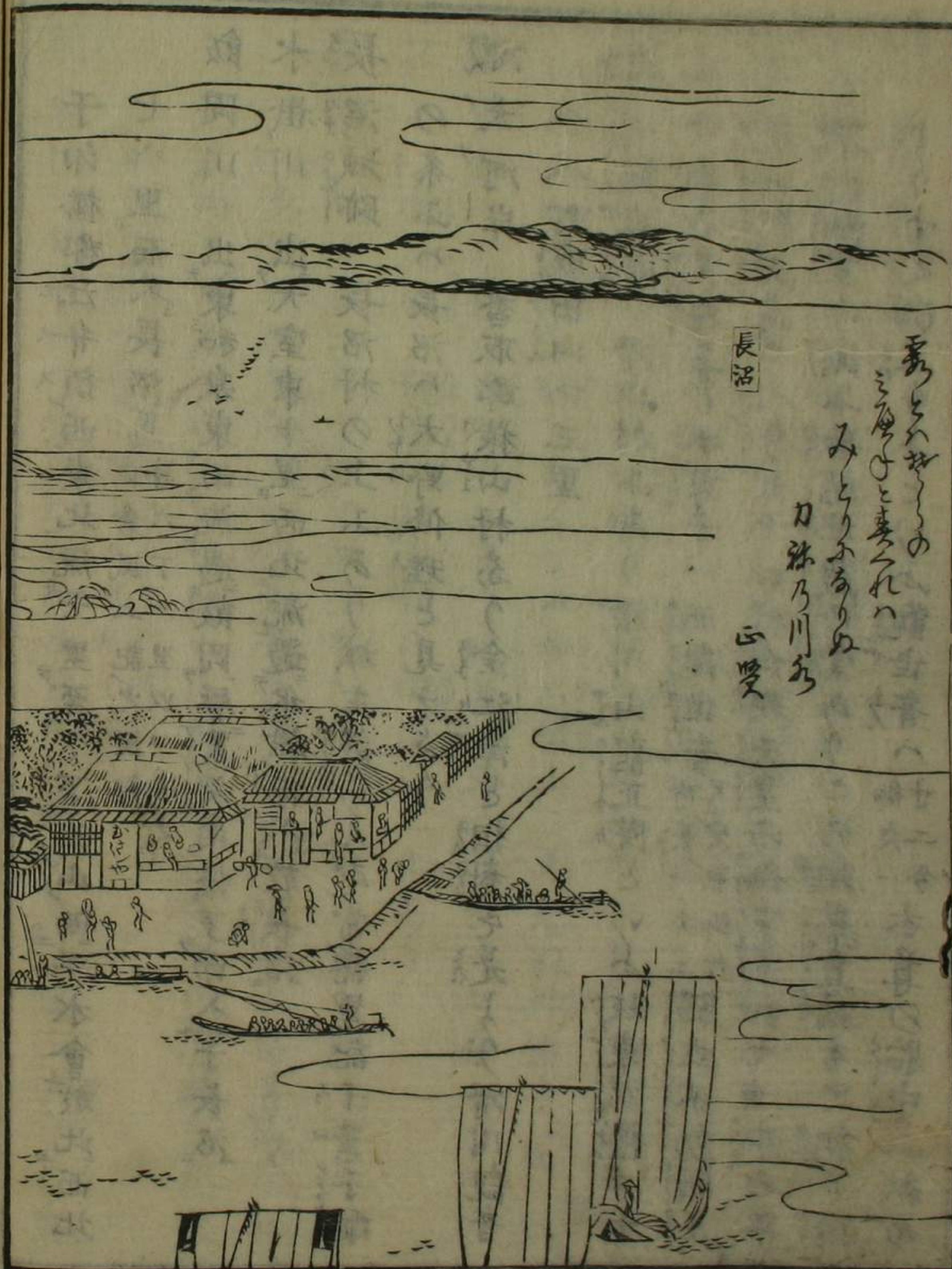
昆沙門天あり人皇五十四代仁明天皇の御宇兼和七庚申の年

草創御堂の側不あり 船越地藏の堂ありこの地藏尊綱もて朝日淵

よりすすひ上あけ といふ觀世音御夫 一本尊 の胎中不あり 綱め



春真



長沼

春と秋の
 ちのちと暮るれい
 みとるふありぬ
 刀洗乃川
 心受

あまふとつふ趣起佐倉風土記云兼和七年安定朝所鑄十一面
觀世音長一大二尺號龍正院小田將治察長一寸二分觀音及地
藏像於小田川朝日淵以觀音納本尊腹初將治感化女自稱朝日
言粉河寺來又老僧可八十網衣浸水而後得二像云鹿嶋日記小
鐘の銘小下總國香取郡大須賀保内滑川山龍正院天和二歲癸
亥四月廿六日と云まり本尊ハ兼和のころ小田宰相將治常陸
と下總のさうひあふ小田川のけさかふちよりとり出ていつ
さまつりー灵像あふよー坂東觀音灵場記卷九のふんゆふと諸
國圭齊録下總國天台宗部小五石植生郡滑川村龍正院
朝日淵本堂より一町をくり西の方田の中ふありむろへ此所
常陸下總の堰あて小田川の流さあてありーあや今淵瀬かくりて草地と
あり大あふだま榊六七本ありて其下ふ碑あり彫て曰
朝日淵觀音應現碑銘

朝日之淵薩埵湯漿朝日淵聖像入綱湯瀑靈液源清人
感享者誰長者將治

東叡凌雲院住持探題前大僧正實乘撰
寛政九年丁巳七月

南郭集三編二九 舟遊刀祢阻雨泊滑河村二首

長江三百里短棹一孤舟水上迷冥雨風前避急流兼葭投泊渚

雲霧問津樓登岸知何處蒼茫惹旅愁

江村春雨裏寥落暮煙疎挈榼傾求酒臨河定得魚蓬窓從泛宅

葦笠混幽居濯足滄浪水行應隱釣漁

菊水井 滑川町入口道の東菊水山の麓あり方六尺をくり石
ふて圍たう清水井あり觀音の靈水とつふ側ふ菊水と云りこ
る碑あり

菊水山城跡 滑川村菊水山の上ふあり佐倉風土記云傳小田氏

城之世居之按小田之系出自粟田閑白道兼而五世八田宗綱以源義朝子知家為嗣其七世正三位中將兼常陸介治久其七世左京大夫政治相續領常陸國其子讚岐守氏治号天為佐竹氏所襲遁於相模國藤沢慶長六年終于越前國其城址在常陸國小田而筑波田土邊今泉田伏木田土浦沢辺常名北條片野柿岳真壁完戸行方海上藤沢戸崎矢田部江戸崎蝦鹿嶋足高牛久牛子生志筑山木水守小美川龍崎上室近田沼崎荊間巖崎巖田楯馬八代皆其子城家臣之所居也疑小田所領地跨此境而以菊水山或為別業或為退老之處者歟東國戰記有滑川城主小田左京大夫政治是與小田太守同人乎未之詳焉又按長元年中小田莊司義英屬下總國司藤原包昌防平忠常馬又散見於太平記者關東軍有小田常陸前司貞宗馬小田民部太輔兼秋預萬里小路藤原俗放流者於後送卿于京馬小田少將小田讚岐守小田中務大輔亦家臣爾

在馬又北條記有小田宰相政治遺其臣菅谷隱岐守率兵屬氏康為而滑川觀音緣記為康和年時有小田宰相將治者未之詳焉恐似傳聞之誤彼姑傳疑聊辨之

耀窟大明神 同書在西大須賀村社後地有一孔拜之為神在未詳其神及造建時世俗言鹿嶋神之祖父也若由是稜威雄走神也歟

正德五年社司飯岡氏請進正一位云
八幡大明神 同村堤の内小あり堤の向小八幡沼といふぬまろ里て其中小鳥居たてり

東三井寺 同村小あり云傳ふ是日本三三井寺の其一ふと云瑠璃光山千手院といふ天台本尊千手觀音側小藥師堂あり堂の脇小井三あり故小名づく歟其初め詳らぶらざまど後ろの山間淺佛具殿谷といひて中英小屋敷跡あり又其頃の寺田ありとて村中佛具殿田と唱ふる田多くあり寺寶小平親皇

西大須賀村

東三井寺 瑠璃光山子手院 什物

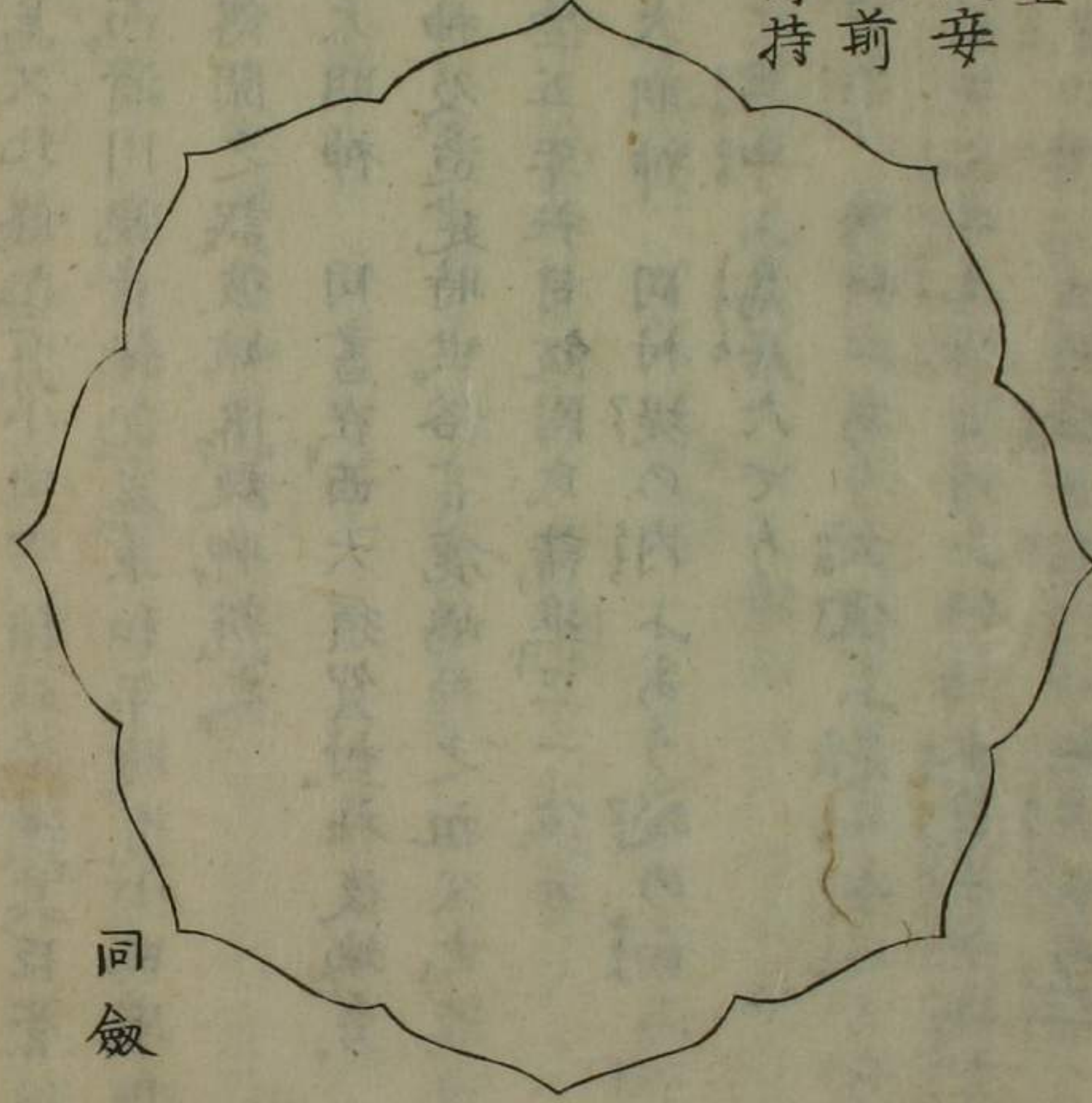
平新皇

将門母

桔梗之前

所持

鏡表



同鏡



銘

大和國

同裏



川南

廿四

將門の妾桔梗の前此鏡一面同懐劍あり里老云この二品むら
しより紛失の事度々ありしが必その家ふたり有て持主よ
り又此寺に納むる事數度不及べりとぞ

西大須賀城 同西大須賀村にあり東國戦記に西大須賀の城主

西大須賀六郎と見ゆ

兒塚

西大須賀村の内四屋とりの所の入口道の東畑の中ふあ

る故ふかゝる名此所を侍るそと里人ふ尋なればあ在所
白浪青林横行の地たるふよりとある少人此通りなるふ衣裝
など剃とる此とるらず剃へ殺害し侍りる夫より此所残かや
うふ号し侍るよう語侍れば今更のこちて塚はなとり
立よりておもひつゝけて廻向し侍る

佳人落命荒原上 薜庭古碑空刻名 勿恨青林犯花影

浮生有限辱兼榮

白浪小浮名残ふがは兒の原戀ぢふをつゝ身とも聞バや

標注小兒の原下總國香取郡大須賀村の道の邊小兒塚あり此
邊則兒の原也今叢祠鳥居ありて里俗兒大明神と云埴生郡の
是ハ香源太河岸より香取郡の滑川觀音ふつゝの間也小異
取郡也源太河岸より行ハ滑川觀音夫より西大須賀村と過て同村の
東國戦記に所ノ名ヲ問バ兒子が原ト申ケル下總守義長西大
須賀六郎ニ向テ兒ケ原ニ謂レ有ヤト云申上ケルハ昔小菅且
林寺ノ住寺智證上人此處ニ間居ス或時智證隣村ニ行日暮テ
歸リシニ此原二年頃十五六ノ童子顔色青サメタルガ立煩居
タリ上人云御身未ダ若年日暮ニ及テ何方へ行者ト見答テ
曰某ハ都方ノ者ニテ候處喘息ヲ長ク煩シガ家乏シク療治不
叶故清水觀音へ七日籠り候所滿ズル夜ノ夢ニ下總國西大須

賀ニ智證ト云高僧アリ尋行テ血脉ヲ傳ナハ本復スベシトノ
告ニ依テ叅候ヘ共草卧テ一足モ引レズ哀レ西大須賀ヲ教玉
ヘト申智證聞テ其人ハ我也トテ菴ニ伴ヒ昼夜礼拜念佛一千
日修サセケレバ次第ニ全快ス行滿チテ法ヲ授ケ都ニ歸スベ
シト仰ケレバ童子悦ビ休ミケル其夜智證ノ夢ニ童子見エテ
曰我實ハ人間ニ非ズ長沼ニ住ル主也三熱ノ苦ヲ不道故ニ童
子ト成テ血脉ヲ戴キ其苦ヲ免レ今天上致マ也報恩ニハ永ク
此處ノ守護神ト成テ民ヲ可守ト云テ失又依之其處ニ今宮明
神ト觀請ス云智證ノ菴室ハ遷化ノ後寺ヲ建号正福寺云云取
今思ふふあの説ハ後人の作あるべト
又佐倉風土記小東國戰記を引テ有永祿中僧來于此而詠歌曰
知具乃波羅能遲波志留毛乃與茂阿良自等古呂迹比斗都迺志
流之那邪礼婆由是觀之文明中有碑而至永祿中碑已失乎今僅

有小祠而俗謂之兒宮馬近年新た小祠と建たり
因云幡谷村ハ是より程近き所也市川團十郎父幡谷村の産ふ
るより馬馬が芝居年代記小堀越十藏生國ハ下總國佐倉幡谷
村の産ふりその子知名海老藏こき唐犬十右衛門名づく所
あり長ト々市川團十郎といふ取意
助崎城 名古屋村小あり佐倉風土記小距佐倉東北三十六里千
葉常胤六子第四胤信居大須賀稱大須賀四郎後退老於此而稱
信濃守其子孫二十葉居之東國戰記有助崎城主大須賀信濃守
信景馬天正十八年與千葉氏俱滅城廢馬壘有舊新二址其舊處
生獨活甚美盛人採之乃為崇近歲村僧採而還菴其夜戶外有聲
曰還獨活竟夜不止僧怖畏不寢夙興還於其處云
公家塚 同村小あり其地言小御門至今不得畚菴傳有貴鄉流卒
干此味詳為何人俗言 朝廷貴爵人謂公家也按元弘之亂笠置

城陷北條高時執^テ後醍醐帝近侍諸卿流^ス之遠國^ニ平大納言師賢
配^シ下總國^ニ寓^シ千葉貞胤乃^レ薙髮名^ツ索貞遂^ニ卒^ス于下總實^ニ元弘二年
十月而南朝追謚^ス文貞公^ト車出^ツ公卿補任增鏡常樂記等初師賢詐
稱^シ主上登^ル于叡山^ニ今以^テ小御門名^ヲ推^シ之恐師賢墓^カ與
高岡^ニ香取郡^ニ源^ノ太河岸^ニ十五六町東^ノ方井上^ノ侯^ノ陳宮
あり石^一万^一天正十八^年寅^年領地^拜領^下總國^香取郡^高岡^二万石

阿部豊後
守正勝云

龍安寺 大和田村^ニあり諸國圭齊錄^下總國曹洞宗^ノ部^ニ二十

一石七斗餘^香取郡^大和田村^龍安寺^と見^ゆ

迎接寺 佐倉風土記^在冬^父未詳^年歷^佛器^多識^永仁三年^有觀音

闇魔夜叉等假面十餘枚^言惠心^之所作^云出^ノ寺^不鬼^ノ舞^と云

大とあり闇魔大王^ふと美々^く衣冠^を粧^ヒ皆面^{をか}あり赤

鬼青鬼^{など}多く出^地獄^不て死^人を責^るまね^{をか}いと賑^り

鹿嶋日記^下小堀村^ノ淨福寺^ノ佛事^不鬼^ノ舞^と云^{あり}

是も廿年^不一度^になる^己ざあ^と佛^ノ假面^鬼ノ假面^牛頭^馬頭

などの假面^{いた}まも^{いと}く^ある^{もの}あり^とり^り

父より^神崎^佐原^津の^宮か^と

名木古城 佐倉風土記^不云^在名木^距佐倉^{東北}四十里^傳柴山^彈

正居^之未詳^其時^世馬東國^戰記^所謂^名木^彈正^忠是^乎

神宮寺 並木村^不り^諸國^圭齊^錄新^義真^言部^不十四石^四斗^餘

香取郡^並木^村神宮寺^{あり}

神崎明神 神崎^不あり^利根^川へ^{あり}出^たる^高さ^山の上^{あり}む

か^い此^山ノ^麓屈^曲ノ^所水^逆卷^て船^ノ通^路至^てむ^つり^く是

を^神崎^ノ卷^と唱^へて^船人^大不^恐る^所あり^と云^り今^ハ洲^い

し^ふ其^項舟^唄あり^とて^ある^を神崎^森ノ^下楫^をよく^とき^船主^と

どの^よく^うと^ふ

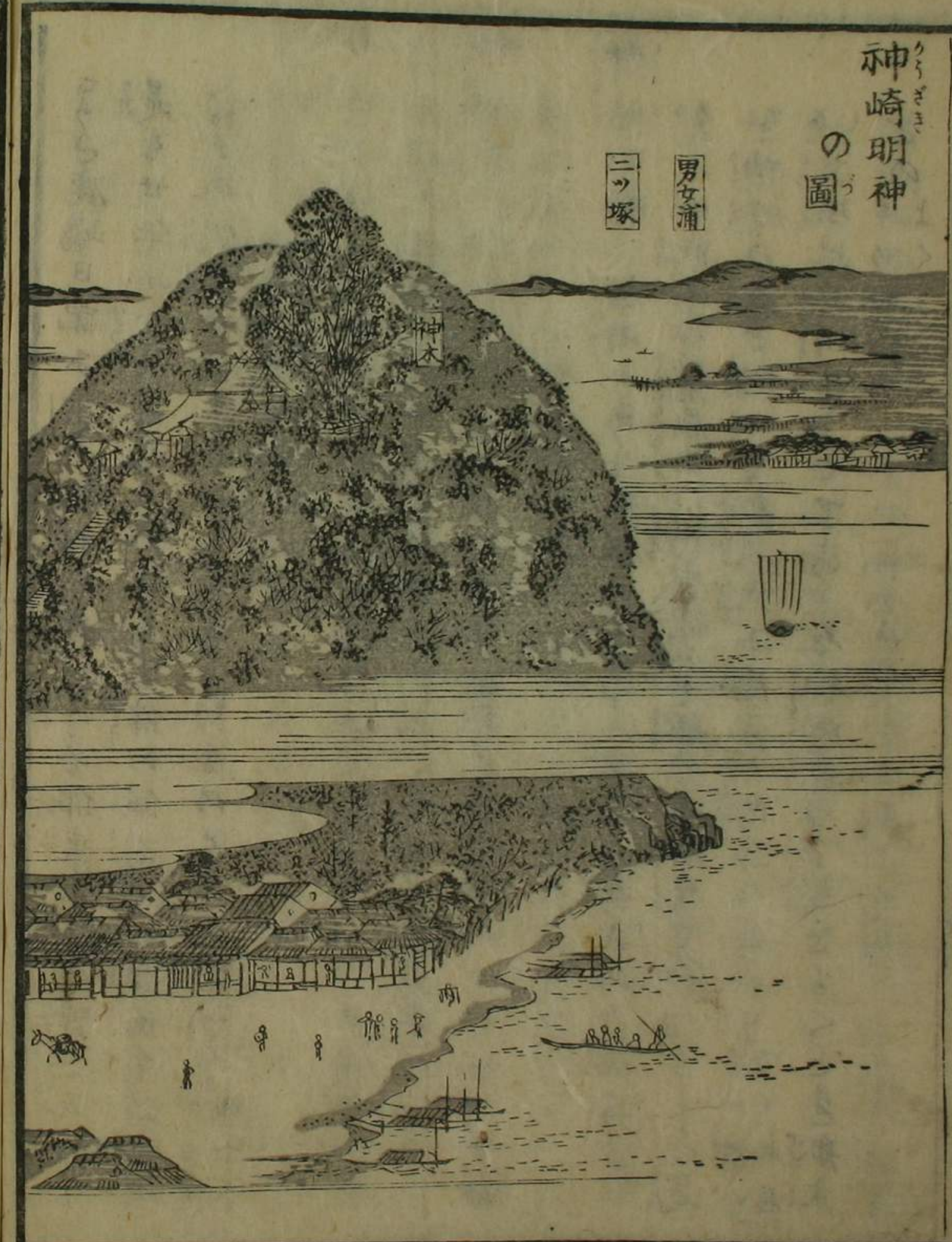


下利根川

春真

神明崎の圖

男女浦 二ツ塚



香取志云神宮を相距夏三里餘同郡神崎村不在傳云面足尊惶
 根尊と祭まりと此社今神宮より幣帛を備て封物を與て別官
 より神地を賜りて神事を執りしむ末社非也然共昔大戸神
 崎兩莊へ別て神宮祭祀の用途を掌り改造の時ハ臈殿を造り
 定役也又此兩莊ハ大祢宜家の旧領也長寛二年六月關白左太
 臣家政所御下文不見えり斯て大戸社末社なきハ神崎社も
 昔末社ある夏決ふ

追考應保二年六月三日の大祢宜日記云又於次男知房者申補
 神崎社宮司可知行彼社領之由書與讓狀畢又嘉元二年四月廿
 二日大祢宜實綱与棄狀不讓與下總國香取社領云大戸神崎村
 田櫻田以下神祭物等之事是等の文を以て見きハ昔末社ある
 む夏愈明け
 鹿嶋日記云かうざさ此神社不詣づ社の前ふふんとやもん

トヤとよふ大樹ありいと年へたる桂の木なりけ也
 神代より志げりてたて湯津桂さかえゆくらんかたり志
 らげも

山桂 本草綱目月桂條
草木錦葉集六行
 枝葉とも白ひい
 樟腦のおと一煎
 トて吞バ桂枝不
 似さり實ハ櫻の
 實不似て皺あり
 茶色あて少一黒
 を帶たり八月頃
 落る花ハ大木故
 見えがさ



宗且寫真

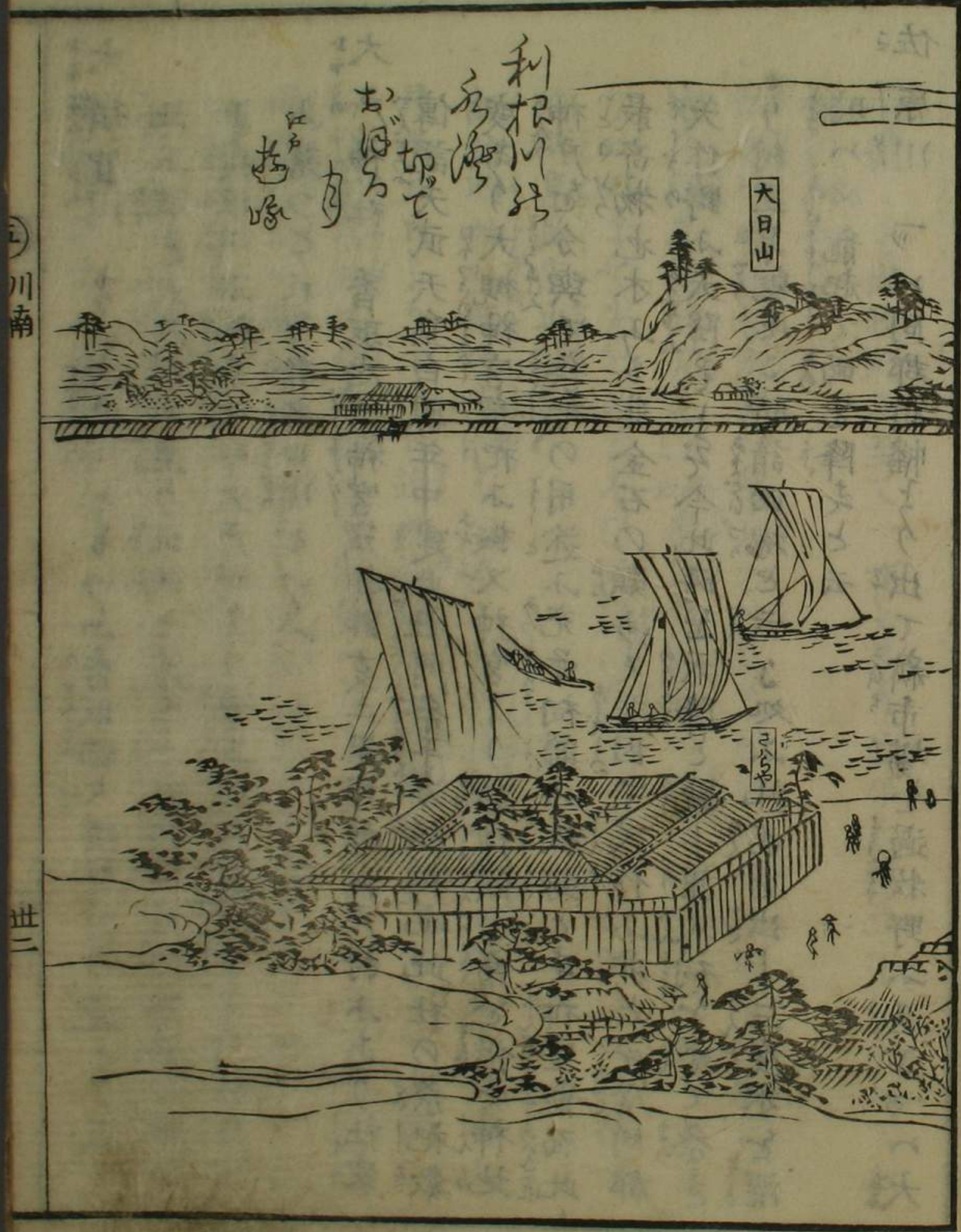
そもく神崎てふ地名はあつと西の方此河むかひ不清久
橋向押砂ふどの村ありいふへへカ根の河面小片ふさた
りいふ元和慶長のころかた此方水せく堤を築て新田を
むらうきたありとそむのちふとへ常陸國河内郡の半田の里
ふさむむりひて二里をくりけ大沼ありこの神崎の地はさ
出たる山崎あて神の社なれば神崎といひへりとあんこよ
り見渡しの中嶋小片葉葦もろそあつとて二くさの葦生たり
上つうさるるいそろそあて陽あ里下つわさなるは片葉ふて
陰ありそれ嶋をふとつとぬといひそこの浦狭男女は浦とい
ふ平治元年の社圖小大浦とも真世守良ともあるはこれあり
その嶋小大神天降まを今の地ふうつまぬらせたり半
田れ里あても此神をうつていそひりけん今俗ふた
まさはといふ社ありそい安婆嶋のよこなうりあやこの近さ

こころある安波大杉明神もかよひてたこ中常陸風土記ふは
安婆之嶋とみえたりそのふたつ嶋より時々龍燈あがりて神
崎の社ふか、り志ばありてもと此所ふへむたつること
ありとるんま三代實録小元慶三年四月下總國正六位上子
松の神小從五位下を授らきことみゆ神崎の西隣の里小今
も小松村ありて正元元年十二月の文書同二年三月此文書ふ
どに小松郷みえたるをむかふこれぞ子松此神あること疑
あうりけ

諸國圭齋録下總國部小二十石大明神 香取郡神崎郷 神崎伊織

と見ゆ

押砂河岸 神崎と相對て川北あり中古大水の節砂おし來りて
出來し地ある故押砂と名つくとつ安波大杉明神へ參詣の
人いふ此河岸より上る安波へ一里半



利根川

世二



五

春真

大須賀川 ちく大戸川ともいふ香取郡大須賀原の邊より出て
北に流き大戸川に至り兩派とあり一は北川尻沼谷原の間より
利根川に入り一は利根川より東に流れ岩崎下より利根川
に落つこれを粉名口川といふ

大戸神社 香取志云神宮茂相距二里同郡大戸村にあり社家
傳説天武天皇白鳳年中建此社所祭手力雄神也此社の祭祀數
度あり大槻神宮祭祀に擬又神宮より諸神饌幣帛を備へ神地
神戸を分與て祭祀の用途に充並祠職の秩録とを神室龍面此
最奇物也木も非金石の類も非因て人作も非と云昔同郡
矢作野に天降ると云今此所を天降と號し里人祠を建て祭ま
り村里早魁と云時請兩塚と云云此面と出し三度水を濯
時ハ必龍起て雨を降すと云

佐原川 同郡折幡より出て新市場を過牧野に至りつハ大

崎邊より出牧野に至り一水とあり佐原大橋の下をきだて利
根川に入る

佐原ハ下利根附第一繁昌の地なり村の中程に川有て新宿本
宿の間橋架架と云大橋米穀諸荷物の揚さげ旅人の船川口よ
り此所まで先をあらそひ兩岸の狭さをうらと誠小水陸往來
の群集昼夜止時あり
諏訪明神社西の方村をつき小有新宿組の産土神あり例祭九
月十五日より十七日迄也牛頭天王社東の方濱宿といふ所小
浜に本宿組に産土神と云例祭六月十一日より十三日迄これ
兩祭礼至て賑はしく何れも二重三重に屋臺十四五輛つゝ花
をかざり金銀をちりばめ錦繡の幕と懸囃子をのゝ拍子つと
ふざやり小町々をむさほする見物に群集人の山をなすこと
とに目ざやうと云祭あり

香取魚彦うらぐりまひこハ佐原橋本町伊能茂左衛門いのりト云い頴則ひなの香取か四家集しよ

良称茂左衛門りやうしやう彌青藍香取郡佐原人やいしやう畧既長篤學嗜古游賀茂真りやうしやう
淵之門學益進うしやう器其作歌以萬葉集為歸別為一家趣傍善画好寫うしやう
梅花及鯉魚騰泉之類亦為世賞玩うしやう天明二年三月二十三日歿于うしやう
江戸濱町僑居年六十其在江戸以自稱香取魚彦故以香取氏顯うしやう
所著有古言粹萬葉集十歌筆端記兩うしやう
夜燭百人一首傳魚彦家集等若干卷うしやう

二本竹 鹿嶋日記しか云、諏方神社の鳥居をたてていと高き石坂しか
をたれば、山のえらに別當の坊あり。坊の前ふ天明三年といしか
ふろ、此夏とみふふとこれ竹生出けるをり。此里志らしか
殿。津田日向守平信之朝臣ついでのよみたまへる歌あり。

南郭集なんかく 將發佐原半七彦十載酒到舟留示二子なんかく

期日將廻棹不關乘興輕一樽携酒別二子即舟情信宿交相得なんかく
江山感且生水郷來往熟重聽竹枝聲なんかく

寬齋遺藁かんさい 佐原訪此江山主人不遇因作かんさい

千里游踪偶遠尋柴門空鎖碧江潯閑庭就欲題名姓春淺芭蕉未

展心

津宮河岸 香取神宮一の鳥居水中つみや不建り。是より香取つみや三社參詣つみや

の人、おれ河岸より上り神宮へ參詣也。津宮の名義ハ當所つみや不つみや籠つみや

神社といふありて。香取志小奥津彦神奥津姫神を祭り。此神つみや

ハ古事記ここと須佐之男命の孫大年神の子あり。延喜式えんぎしき小籠神二つみや

座ざ從五位上大邑刀自次おと小邑刀自おとやいろと素津宮といふつみや

そむく津といふ。湊入の船おのくおの處つみや不集風を待つ。ときと津つみや

といふ。おの所つみや不船のたつと所ろ。鹿嶋しか不ハ今大船津といふとつみや

もいふ。ハ津宮と云ひ。ハ風土記ふうど不見也。吾神宮の津宮つみや

ハいふ。ハ船の來集ハ所ふ了故津といひ。おの津鎮護つみやの宮たつみや

了と以て津宮といひ。ハ了了了了。その後人居とあり。村の号とつみや

もあきり

香取大神宮

下總國香取郡正殿經津主大神神代より御鎮座

みていと古き神あり。夏ハ香取志不詳クふまハ畧之

相殿神

比賣神 天兒屋命 武甕槌神

撰社末祠をべて八十末社之と畧之

大小の祭祀をへで九十餘度内十八箇度大祭祀畧之

神寶

廣矛 于滿兩顆 神楯 太刀 矢 鞭

此外古器古書等數多

名所

龜甲山 木母杉 弓掛杉 乍候杉 三本杉

牧野 釜塚 笠塚 鹿塚 星塚

神井

御手洗井 氷室井 龜井 大坂井 琵琶井

下の井 真彌井 西隱井 東隱井 奴久井

石井 太刀洗井

七橋

大坂橋 五段田橋 萱田橋 小山橋 下井橋

氷室橋 地口橋

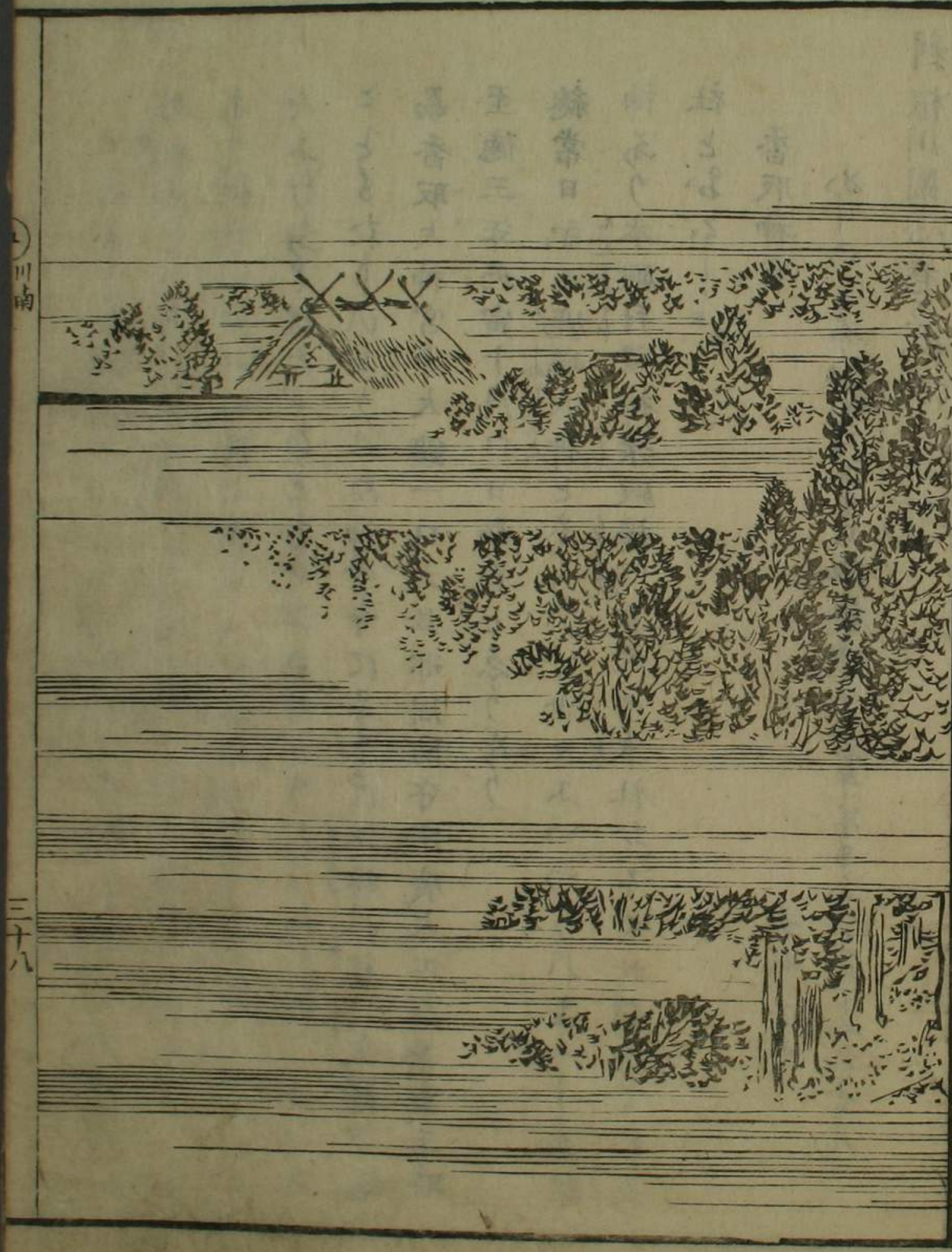
八坂

大坂 龜邊坂 若宮坂 下井坂 氷室坂

御手洗坂 奴久井坂 幸若坂

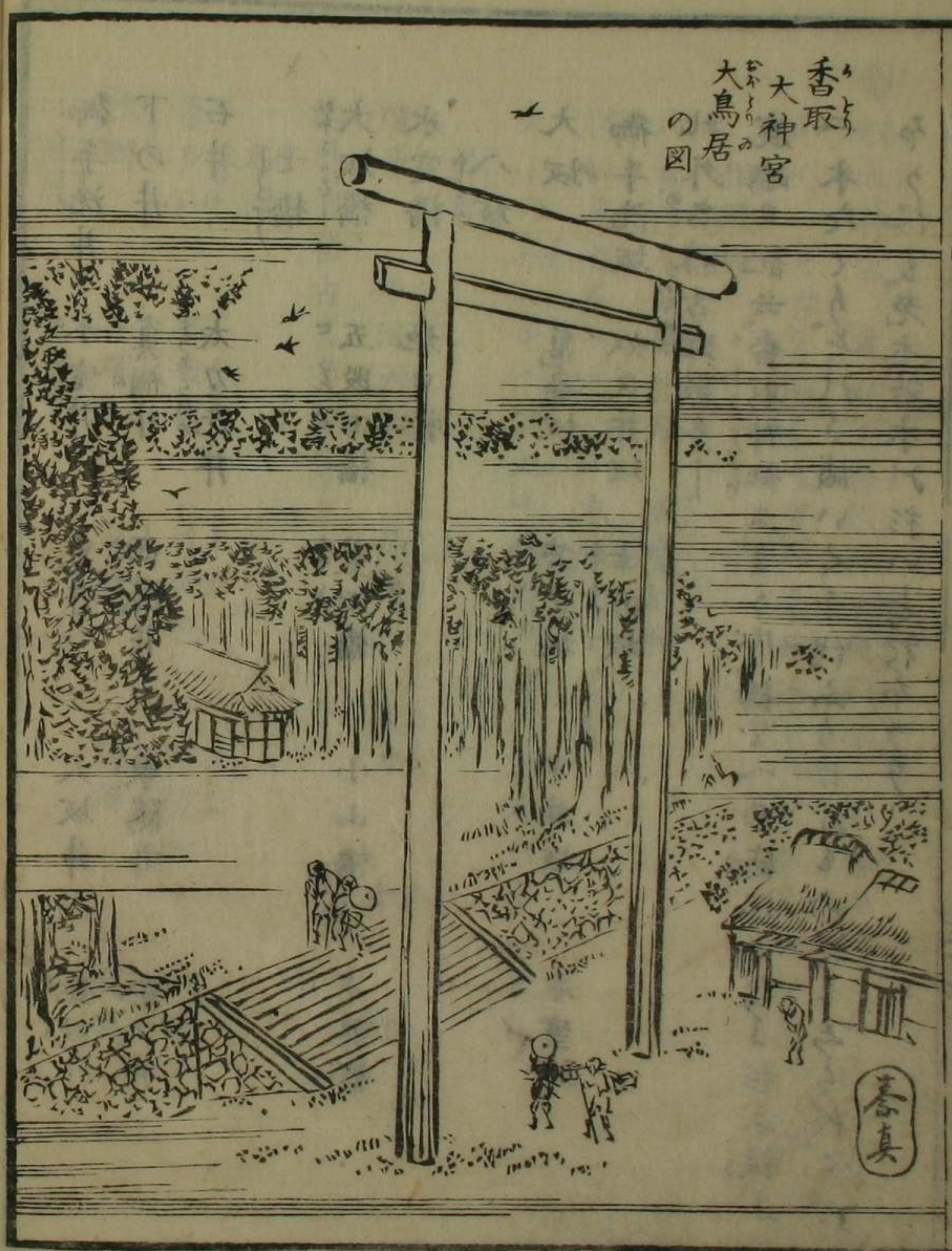
此外名勝古跡數多

鹿嶋日記云香取神社にまゝうた。御まへの庭に大坂杉不披ふ
二本たてり。そみさほいく千代ふりけんものともあらん。この
るうたも。老木若木杉いとわわうり



川南

二十八



香取大神宮
大鳥居の図

五

春真

まろろをぬ國戎やへー大神宮あかーこまいたれ本と
杉社のうろれ方に櫻井馬場とてとなくみまをわさる所
あり板來の里への代とあるらんれどひーらふちどどらか
たふけあをれたるひとむきび立のりたるあぞたーくにそ
ことともたむひとくれぬ神宮寺にまうた洪鐘銘に奉懸下總
忍香取大神宮寺大鐘一口大且那周防守宗廣大工泰景重于時
至徳三年丙寅十月口日敬白とるたり

總常日記小鹿嶋大神とふらひて世々ふいつくれおへぬ
神あり本殿并殿神樂殿樓門其外の末社おなく此國あてり大
社とおふー云

香取神宮

香取 正文

かーあろ布初の屋雲の御稜威より草本もあつふさくやめまん

利根川圖志卷五終



